

# 伝文

日本口承文芸学会 会報

【伝文】第22号 1998年3月

発行 日本口承文芸学会

〒150東京都渋谷区東4-10-28  
國學院大学文学部 伝承文学研究室内  
☎03-5466-0224

## 電承文芸の時代

竹原 威滋

ブレーニヒのドイツ現代伝説集・最新巻(1996)にこんな話が載っている。-「百貨店の顧客カードを持っていた婦人が0マルクの請求を受けた。その月は何も買わなかったので、納得して、請求書を無視した。ところが、再び督促状がきたので、婦人は手紙を書いたが、なしのつぶて。というも、支払いのシステムはすべてコンピューターで処理され、人手のはいる余地はなかったからだ。さらに1ヵ月後、百貨店は法的措置を取るとともに顧客カードを取り上げると知らせてきた。そこで婦人は所定の小切手に0マルクと記入して送付した。程なく、代金受領の知らせがきて、ようやく一件落着した。」この話は、コンピューター万能の現代社会では、いかにもあり得る話だ。人と人の心のふれあいのない無機的な人間関係は、インターネットや電子メールによってさらに増大している。

その一方、若者たちの間でパソコン通信上でのお喋りサークルがはやっている。相手の顔がみえない匿名性とパソコン上での仮想の語りの場から新たな話が生まれている。このような話には、電腦空間と現実の空間の落差をうまくトリックに使ったミステリー風のものが多い(例えば、白水社刊『日本の現代伝説・魔女の伝言板』参照)。わたしはこの種の話をも「電承文芸」と呼ぼうと思う。口承文芸は人と人が向き合い、特定の人に音声と身振りを通じて伝えられる一回限りのものであるのに対して、電承文芸は不特定多数の人に音声と文字・図形情報を通して瞬時に地球的規模で伝えられる。しかもアクセスさえすれば何回も話を享受できる。話は切り取りとコピーによって、いともたやすく改作されうる。電承文芸は新たな可能性を秘めた文芸である。

大林太良氏は本学会の20周年記念大会講演で「口承文芸の時代は終わりつつある」と述べられたが、電承文芸の時代の幕開け(?)を迎え、世界の諸民族の口承文芸を電子ファイルにして精緻な国際比較を試みる時期に来ていると思う。本学会と共通する英語名を持つ国際学会(International Society for Folk Narrative Research)の第12回大会が、Horizons of Narrative Communication をメインテーマに、今年7月末にブレードニヒの主幹でゲッティンゲン大学において開催される。今までは小澤俊夫氏を初めごく少数の諸氏が国際学会に関わってこられたが、今後は本学会会員がこぞって参加し、すそ野をひろげ、近い将来、臼田甚五郎氏が『伝文』20号で提言されたように、日本で国際学会を開催すべきであろう。また、学会のホームページを開設し、世界の研究者間の情報ネットワークを構築すべきであろう。ゲッティンゲン大会の詳しい情報は、竹原まで(E-Mail: takehat@nara-edu.ac.jp)。

シンポジウム 音・声を聴くいとなみ—あるいは&lt;口承&gt;と&lt;書承&gt;との間—

琴の声・歌の声—『琴歌譜』の耳—猪股ときわ氏/奄美の「うわさ歌」の生成と&lt;聴く&gt;いとなみ—歌あそびから舞台へ—酒井正子氏/「聞く」から「話す」へ—「世間」の動きとのかかわりから—山田巖子氏

1997年10月18日に行われた例会に、上記の題を掲げました。今まで、口承文芸学会で、「語る」いとなみや「歌う」いとなみを題にしたシンポジウムはあったけれども、「聴く」いとなみについて取り上げられたことはおそらくなかったと思います。「聴く」いとなみを技術とは見ずに、誰もが当然のように行えるものだと扱ってきたのかもしれない。けれども、「聴く」いとなみは、語り手論や歌い手論に対して聴き手論を必要とするぐらい重要な技術であると思います。ぼくの場合そのことを身近に感じたのは、高校や予備校や大学の教室においてでした。ぼくは今年、高校を1つ、予備校を2つ、短大を1つ、大学を2つ教えました。はっきりいって、聴き方の上手な子供の集まる学校と下手な子供の集まる学校とがありました。教育に携わるぼくにあって、聴き方の上手下手の問題は、とても現実的な問題でもありました。

「聴く」いとなみについては、早く昭和10年代に柳田國男の発言がありました。それは『国語の将来』に収められた「昔の国語教育」です。これなどは、柳田國男の読み替えを進めつつある現代において、とてもおもしろい材料を提供してくれると思います。柳田はその中で、「話し方」教育よりも「聴き方」教育を行うべきだと、学校での「話し方」教育の拙速を批判しています。口は達者にいいながらも、耳が不自由では、結局は口だって育たないことになり困るじゃないかというのです。

さて、現代では、これに関連して、口承文芸の研究においてももう一つの問題が係わってくると思います。それは、口承文芸の研究が「①語り手(歌い手)が語り(歌)を語る(歌う)」⇒(声・音・テープレコーダー録音)⇒「②聴き手すなわちフィールドワーカーが聴く」⇒(テープ再生・文字表記・記譜)⇒「③フィールドワーカーすなわち研究者が書く」⇒(活字・製本・昔話(民謡)集・研究書など)⇒「④研究者もしくは読者が読む」という回路を経て、学問として成り立っているということについてです。これを考える時、①⇒②は、通常の<口承>といえるものであり、③⇒④は<書承>といえるものですが、中間の②⇒③は、そこで<口承>から<書承>の変換を行っています。すなわち一人の人間(フィールドワーカーすなわち研究者)が「<聴く>⇒<書く>」と変換を行っているのです。この時、「聴く」いとなみがすぐれて「技術」であるとするならば——そうしてそれは技術以外の何者でもないのですが——、ここには技術ゆえの技量技質の偏差が現れてくるのです。つまり、「聴く」いとなみを考えることは、口承文芸を研究するぼくたちの「聴く」いとなみの技術の位相を改めてとらえる契機にもなるということです。そうして、それは、口承文芸の研究において自明であった昔話集や民謡集の読み方に、何らかの反省と希望とをもたらすのではないかと考えたのです。

ところで、②⇒③の変換の試みは、なにも口承文芸の研究者だけが行ってきたのではありませんでした。文学史を繙くと、ぼくたちは多くの同様の試みに行き当たります。たとえば、『浮世風呂』『浮世床』は、いわゆる声帯模写や形態模写を文字に移して成立したものです。この時、「聴く」いとなみから「書く」いとな

みへの変換は、どのように可能であり、また不可能だったのかを、これらの先輩の書物から窺うことも、ぼくたちの技量技質の偏差を知る上では、重要な示唆を与えてくれるでしょう。

当日のパネリストは、遠く古代の『琴歌譜』における②⇒③の技量技質の偏差を追求した猪股ときわさん、近く現代の奄美の「歌掛け」の中に飛び込んで②⇒③の実践を模索した酒井正子さん、ぼくたちの周りまでがフィールドでぼくたちの「噂」を気を抜かず観察している山田巖子さんでした。この3人が時には響きあい、また反撥しあいながら、基調報告を行いました。司会進行はぼくがつかめました。

そこから気づいたことをいくつか、思いつくままに。

1つは、音・声について、①⇒②の場面を追った、つまり、もっとも「音・声」であるはずの場面を追った山田さんの発表が、一番文字文字していたこと。これは山田さん一人の問題ではなくて、きっと世間話や噂の研究の一つのスタイルなのだと思います。世間話研究が「口承文芸」だけに止まっていて、もっと広いメディアと繋がっている現状を表していたのではないのでしょうか。2つは、酒井さんが述べた「聴く」のは耳だけで聴いていないということ。体全体で参加して聴くという態度。語り手が身振りをも交えて語るように、歌う時はその場に加わらなくては聞けないという奄美の状況。これは「歌う」ことは「聴く」ことということでもある。①⇒②は②⇒①でもあるということです。酒井さんは③(④)⇒②についてもふれていました。矢印は一方通行じゃなくて双方通行だったのか、と気づきました。3つは、猪股さんの述べた「声」と「音」の問題。「音」をも「声」として聴くあり方について。特に「琴」は、古典の中で「御琴」と尊称されるとのこと。琴の音が託宣を伝えるのは、小鳥前世譚の鳴き声の「聴きなし」を思い出させました。それと、『琴歌譜』の成立のあり方が、何だか近代の昔話集の作られる契機を思い出させました。②⇒③の試みは、いつの世も、<口承>の滅びの序章なののでしょうか、それとも違うのでしょうか。

会場からは飯島一彦さん、田村みずすさん、藤井貞和さんが発言しました。飯島さんはこのシンポジウムが纏まらずに失敗だったとの意見を出しました。ぼくは、ここで一つに纏まるようなことは狙わずに、それぞれの研究における「聴く」いとなみの偏差をはっきりできれば、口承文芸の研究でおそらく初めての「聴く」いとなみの巡るシンポジウムは成功だったのだと思います。田村さんからは、アイヌ研究の立場から②⇒③の実践を巡る実「技術」的な質問をもらいました。②⇒③の「技術」について、ぼくたちが未だ確実な認識をしていないことを痛感させられた一瞬です。アイヌ研究の場合、事態は逼迫しています。ここでの問題はシンポジウム終了後も決して追求を止めてはいけないのだと思いました。藤井さんは、最後に研究の必要性についての意見を述べて、全体をまとめました。司会のぼくは、皆さんのお世話になりっぱなしでした。感謝します。シンポジウム終了後、会場1階で懇親会、その後ぼくたちは9名で「沖縄亭」に繰り込み、痛飲。酌訂して、お茶の水から上板橋まで千鳥足で歩いて帰りました。(東京都)

## 《報告》 語りの場の現在

／1997年・千葉県 米屋 陽一

『口承文芸研究』（第20号）56、57頁に記した「民話の現在」のうち、新しい語り手たち・語りの場に関する催し物のいくつかを報告したい。

近年ますます賑やかになってきた民話イベントは、老舗の岩手県遠野市、山形県新庄市などは全国から愛好者、観光客を集めている。全国的なものには、日本民話の会主催の「語りの勉強会」、語り手たちの会主催の「語りの入門セミナー」が開催された。また、第3回「全日本・語りの祭り」（主催・同実行委員会）が山口県徳山市にて、10月12～14日まで開催され、メインステージには約1600名の来場者があった。このように、新しい語りの場には多くの市民が参加しはじめている。

千葉県内には二つの大きなイベントがあった。一つは、市川民話の会主催の第20回「市川の民話のつどい」で、11月22日、メディアパーク市川にて開催された。語り、幻燈劇、三味線語り、人形劇、二人語り、民話劇「八幡のやぶしらずと黄門さま」などがあり、約200名の来場者があった。

もう一つは、「'97ふなばし民話フェスティバル」（主催・同実行委員会）で、11月30日、船橋市塚田公民館にて開催された。プレイベントとして、「座・おはなしのはな」のメンバーが市内西部地区7小学校、県立船橋養護学校へ出かけ、約1900名の子どもたちに日本の民話を語った。後日、集まった絵画436点は「子ども民話絵画展」として市役所ロビーおよび当日の会場に展示された。また、子どもの語り手、紙芝居の演じ手を育てる「子ども講座」（6回・参加者15名）、「民話講座」（4回・参加者約200名）、「民話散歩」（2回・参加者約70名）が開催された。

当日、午前の部（全体会場）の開幕は「語りの場・パフォーマンス」。新潟県栃尾地方の「……あったてんがのう」の語り口を生かした「わらとすみとまめ」に10数名の子どもたちが口をそろえて「サァンスケ」の相槌。かつての語りの場が再現された。その後、伝承の語り手、新しい語り手の語り、人形劇「さるじぞう」。

午後の部は、子どもの語りと紙芝居の部屋、外国のむかしばなし、塚田村こんな話があったとさ、かたりっこの部屋、人形劇とパネルシアターの部屋などの各会場での出し物。午前、午後を通して約1,000名の来場者があった。（千葉県）

## 『女子高生が語る不思議な話』

久保 孝夫

北海道の函館大妻高校の生徒の間に広まるうわさや怪談話などを6年がかりで調べて収録した『女子高生が語る不思議な話』（青森県文芸協会出版）を出版した。情報や流行に敏感な女子高生が、モダンホラーの枠組みに入る類話を、時に笑いを交え、時にブラックユーモア風に語る1,200話。約1,000人の生徒からアンケートや聞き取り調査を行った中から抜粋した。これらの話は友達から友達へ、クラブの先輩から後輩へと語り継がれるだけでなく、テレビ・雑誌からも大きな影響を受けている。

また、聞き手を引きつけておいて最後の一言でどっと笑わせたり、あっと驚くオチをつけるのも、「語り」の文学である現代の民間伝承の特色。テレビのお笑い番組の影響か、女子高生は話が受けるコツをわきまえている。

全体を家、学校、病院、宿、トイレ、車、道、トンネル、山と海、墓、死、霊、怪、写真・電話、夢、動植物、ことばの15に分けているが、いずれも霊的なものとの関わり合いをのべていることと、「交通事故」「死の知らせ」など死にまつわる部分がある話が多く語られている。一つ的女子高校を対象にした継続的な調査は「現代民話」を知るうえで貴重なものとなる。

民俗学者・神奈川大学の宮田登教授が「序文」の中に次のようにのべている。

……四つには話のモチーフは、類型的なことはもちろんであるが、「学校の怪談」「トイレの花子さん」型の全国レベルから、「消える乗客」「オルレアンとうわさ」のような国際レベルに至るまで広く網羅されているほか、やはり地域ならではの土着型も生まれている。そこには、メディアの媒介による女子生徒同士のコミュニケーションの対応が想定されるわけで、民間伝承と情報手段の関係を分析することが一つの課題となる。（北海道）

連絡先：青森県文芸協会出版

佐々木達司

久保孝夫

## 新刊紹介

(書名／編著者／発行所／発行年)

- ・『霊感少女論』(近藤雅樹、河出書房新社、1997. 7)
- ・『女子高生が語る不思議な話』(久保孝夫、青森県文芸協会出版部、1997. 11)
- ・『奄美・沖縄女のことわざ』(田畑千秋、第一書房、1997. 11)
- ・『近代文学とフォークロア』(野本寛一、白地社、1997. 11)
- ・『赤ちゃん列車が行くー最新モードの都市伝説』(ジャン・ハロルド・ブルンヴァン／行方均訳、新宿書房、1997. 12)
- ・『仮面と神話』(大林太良、小学館、1998. 3)

## 受贈書リスト

- ・『国文学研究資料館報』第49号(国文学研究資料館、1997. 9)
- ・『国際日本文学研究集会議録(第20回)』(国文学研究資料館、1997. 10)
- ・『ケガレとしての花嫁ー異界交流論序説ー』(近藤直也、創元社、1997. 11)
- ・『奄美の「シマの歌」』(中原ゆかり、弘文堂、1997. 12)

## 事務局報告

### 第22回日本口承文芸学会大会のお知らせ

6月6日(土)、7(日)、帝京大学(東京都八王子市)において開催されます。

公開講演・シンポジウム・研究発表・会員総会・懇親会などを予定しています。詳細については後日お知らせします。

日本口承文芸学会への入会希望者は入会申込書をご請求下さい。

入会金1000円 年会費4000円

入会申込書請求先：〒150-0011 東京都渋谷区東4-10-28

國學院大学文学部伝承文学研究室(野村教授)内

日本口承文芸学会事務局 TEL 03-5466-0224

送金先：[郵便振替] 00180-4-44834

The Society for Folk-Narrative Research of Japan

c/o Prof. J. Nomura, Kokugakuin University,

4-10-28, Higashi Shibuya-ku, Tokyo, 〒150, Japan

\*口承文芸に関心のある方を広くご紹介下さい

☆編集担当は、米屋陽一・常光徹です。